

『明治 32 年の函商生修学旅行記(函館~東京)』

北海道廳立函館商業學校
第一回卒業生 竹内鶴吉氏

明治 32 年 11 月 30 日に発行された函館商業學校同志會雜誌第壹號に掲載された竹内鶴吉氏(明治 33 年 3 月 30 日卒業)の修学旅行記を原文(句読点付記)のまま各日の冒頭部分を抜粋・転載させていただきます。当時の様相に思いを寄せてお楽しみください。全編は臥牛 64 号へ掲載予定です。

本年の修学旅行は大いにその範囲を広くし本科三年は東京、本科二、一年は仙台、予科二年は噴火灣一周、予科一年は駒ヶ岳一周と定め、予は其の三年に属するを以て昨年十二月より修学旅行費として毎月一円宛収め、本年十月中旬頃旅行の予定なりき、然るにこの九月校長並びに高野教頭は商業學校校長會議に列席のため上京せるにより、同氏方の上京中にせんと議一変し旅行発途は九月中旬と定められたり。吾々は昨年より乃に是の事を以て心に待ち我級十一名の内九名は旅行加盟者なりしは比較的多き方なり。愈々「出発は九月十八日当港解纜の朝顔丸を以てするを以て同日午前六時までに登校すべし」との掲示出でぬ。吾々は今更の如く嬉しいやら忙しいやら其前日は旅装に匆々(ソウソウ)としてその日を絡(カマ)え早く夜明けよかしと臥に床に入りぬ。

九月十八日、鷄鳴を破って旅装に懸かり萬端に出来て登校致し候えば一行皆既に門前に集まり居候。この日は仙台行き本科一、二年合併隊も萩濱まで同船する事と相成り候。本船朝顔丸に至れば一行の坐乃に定まり居り荷物を整い直ちに甲板に飛び上がり申候。當日は朝天晴れ旭光海波に破けて焼くが如く臥牛の色益々濃く灣上の風愈々快く野生の如き朝寝太郎には又と得難き朝景に御座候。稍々定時と相成候えば一分の違いもなく解纜仕り候へしは流石郵船會社丈に御座候。此日は浪も起らず風も立たず青波萬里疊(タミ)の如く實に近來稀なる好天氣なりし爲め船は少しの動揺も無之候。然し逃れ難きは天井近く三等船室の狭溢(キョウイツ)函の如きにて臭氣さへ有之候。此の度は船中に二晝夜宿りの都合なりしより一日分之食料及び果實菓子等皆携帯仕り漸く行李を解き珍味の品評始め候……

翌日(廿日)に相成候えば天候更に險惡となり風は愈々暴れて船尾に攻まる、浪は愈々怒り鞆(トウトウ)船の兩舷に吐咸(トカ)して、轟々雨は上下左右に飄弄(ヒョウロウ)せられ室内の客轉輾飄弄(テンテンヒョウロウ)せられて階段に頭を打ち船壁に腰打ちブリキ罐小荷物室内に跳廻され嘔吐の聲は濤響(トウキョウ)と和して凄絶、申分もなく三等船室は是れ一場の避病船其俣に御座候。船客は大抵茶色仕人の如く生きてる心音無之候。船は追風を受るに付セールを二三枚揚げ全速力を以て浪の内を猛進仕候。此の船の全速力は僅に十一哩にして誠に氣のもめる事に候。此の邊は總洲沖合と覺へ陸影は景色もなく無意識に連續仕候…

明くれば九月二十一日、船は横濱港口近くに淀泊仕居り眼前にて市街を望み背後には佛船一艘外に四本マストの外國船及他二三艘は同じ難に遇へし船仲間候。港務局の検閲船は信号旗を揚げて検閲を求めつつ有之候。時し灣の向うより黒烟勇ましく進航し來る山の如き船は我船より一日遅れにて函館出帆の松山丸に御座候。稍而我船は検閲船と數度の信号にて検閲済みしと見へ第一に入港許可と相成、續て來るは松山丸、第三は佛船との順序に入港許可と相成り昨夜の意趣返しに是れ見よかしに暁霧破りて入港仕候へしは勇ましくも又小氣味よき次第に御座候…

當日は横濱市中を見物仕る豫定に候へしも折惡しく降雨烈しく掘路歩み難きより直ちに九時の瀛車にて東京へ向う事と相成り勾々(ウウ)旅店を發し横濱停車場より乗車仕候。申すまでもなく瀛車旅行は瀛船旅行とは其楽しみ雲泥の違にて實に快く誰しも撰む所に御座候。稍而瀛笛一聲發車仕候えば矢の如く進行仕り昆屯たる鐵路の轟聲中に兩望の風光は出沒變轉仕り山を迎い野を送り田に出で谷に入り一々送迎に暇もなく候…

是より淺草行鐵道馬車にて寢所に向い有名なる銀座街を通り過ぎ申候。此は東京否日本にても井然として宏壯を極めたる街衢(ガイク)にて雲を凌ぐ高樓櫺比し山の如き大厦鱗次し人道は煉瓦を敷詰め車馬絡驛人行肩摩し且又全國貨物集散の中心なれば商業の旺盛なる實に目を廻す如くに御座候。稍而馬車は日本橋區を通り右に折れ馬喰町二丁目にて降り山城屋と云う旅店に着き申候。茲にて食事を終い高野教諭山田氏に引率せられ東京工業學校參觀に出立申候…

翌朝八時より市内巡回の都合なりしに高野氏に引率せられ宿を出立申候。當日は第一高等大學校の方面に向い此の日(廿二日)は晴天なるも連日の降雨にて街路も谷地の如くは成居り夏靴達は随分困り候。途中にて又しも空合面白からず小雨さへ加わり來り候えば今日も如何と氣違候へしに其内に全く止み再び晴天に復し候。稍々にして同校前に達し候へば第一に目に止まり候は赤塗の寺院の門の如き巖めじき門有之是は大學の赤門と云うに御座候。

舊加賀侯邸の跡にて同門は同邸の門跡なりと申候。稍而正門より構内に入り候へば煉瓦積の高曾なる建築彼方此方に有之理・法・工農・醫・文と各科別々の建物にて日本一の最高最遠の學理を研究する所として外形を見るも充分の値か可有と存じ候・・・

此處は市内最も大なる公園にて櫻松樹の大なるもの澤山有之候。花時の好景思いやられ候。同公園は一体に小高く或いは忍ふか岡とも申すやに聞及び不忍池と對し面白き名稱(メイショウ)と存じ候。猶(ナカ)又比叡山に模して東叡山とは申すよしに御座候。此處には彰義隊の墓列び居り徐(モロ)に戊辰當時を思出され墓前には香華の煙不盡(フジ)候又彈丸の痕點々(テンテン)たる門の如きもの有之。是は寛永寺の表門にて戊辰の役の記念のよしに御座候。其外東照宮及五曾樓等實に壯嚴のものに御座候。清水閣なる觀音堂二丈餘の釋加如來の座像等有之。徳川氏の靈廟目も眩まる程美麗に御座候・・・

翌日(二十三日)は午後より我在京會員の懇親會の招待に預かりし日にて午前は第一に高等商業學校に至り同日は秋季皇靈祭にて休暇日に候へしも高野教諭の掛合により内部參觀を許され教室實踐室商品室講堂等參觀仕り候。同所より丸の中の周圍堀に沿うて廻り申候。文部省大蔵省内務省印刷局日本銀行等を見物士候。同銀行は全國金融を支配する機關にて其建築の廣大なる實に驚き申候。同行隣には目下三井銀行建築中にて是亦(マタ)宏大日本銀行と比適する様に思われ候。私立銀行として斯の如きは全國稀にして此の行を以て見るも同家繁盛何うに餘りあることと存じ候。それより日本郵船會社本店日本海上保險及明治火災保險會社東京府廳等有之、馬場先門より二重橋に向い申候。同橋は宮城の正門前に架せられたる御橋にして右方御築垣の上を遥かに鳳闕堂(ホウケツウ)のを拝まれ九重雲深うして綾に畏こき邊り万世一系至尊の在ます所にして覺はず頭下り泰平風颯(フウウ)たる所鶴舞い千代田の岡の緑松の下龜歌うて彌栄う御代を壽くを覺へ候・・・

是より歸途に就き新橋にて晝飯を喫し招待されたる日本橋呉服橋外八洲亭に向い候。同會は午後五時頃散解致し歸宅仕り候。

翌日二十四日は自由解散にて各自は親戚或は朋友之宅を訪ね又横濱に出懸ける商人氣風もあれば又鎌倉邊に趣く風流氣取りも有之候。野生は朝より淺草に散歩仕り候。此日は非常の晴天にて人でも朝來より繁く御座候。既載の仁王門より往復雑沓を極めたる仲店前を通り勸工場を見、觀音堂の前に出で五重塔を望み其他二三の堂を見て花屋敷に入り申候。同所は動物園の如く異獸珍禽等澤山有之周圍に奥山閣とか申す五層の高樓有之眺望甚た宜しく階下には蓄音器有之賃を取りて聞かせ居候。是より凌雲閣に向い申候。層樓上にて四方を眺望仕り候へば東京市中双眉の内に有之候。眼下の行人も豆粒の如く見へ申候・・・

朋友と共に神田川の南方に當ての岡阜なる駿河台に至り同所に洋風に建てたる宏大なる建築は露人ニコライスの天主堂に御座候。中に入れば金銀の装飾をなし美麗を極め居候。同所より下り神保町小川町に散歩仕り歸宅致し候。同夜は淺草須賀町なる高野教諭の宅に招待せられ午後六時頃より一同揃うて同氏宅に罷出候へしに山海の珍味天厨の佳肴を饗せられ且同氏母堂及賢弟の信切なる御對遇に預り厚情の程一同啻(タゞ)深く感謝する所に御座候。

翌日(二十五日)は兩國より所謂一錢蒸氣船にて吾妻橋まで至り是より街乳山に上り巾一寸したる岡に候へども大樹を以て掩(材)われ段を上れば宮ありて、宮の境内より隅田川を挟んで眼下向島を望み可得候。同所を下り渡船にて對岸の墨堤向島に向い候。巾四五間の平坦なる土手長く兩側は櫻樹を以て掩あれ居候。頃も頃とて葉さへも落果て瘡稍(ソウショウ)の鶺鴒聲(カサギ コイ)と寂しく被感候。然し春風暖かなるの日に至り候…

晝飯を喫し午後は本所深川方面として第一に龜井戸天神に至り候。追手ながら東京五大橋の事を記載仕候へば先ず永代橋、厩橋、吾妻橋は鐵橋にて洋風とも可申か、兩國新大の二橋は和風とも可候。釣橋二て無之、宛も長蛇の川を横切るか如くに御座候。而して隅田川は舟運便にて客乗せに蒸氣船は絶えず上下仕り居候。野生等の一行は深川公園より永代橋を渡り鎧橋日本橋を渡り歸宅仕候。

翌日(二十六日)自由解散と相成或は高輪泉岳寺に淺野長矩外四十七義士の墓を見舞うもあり又四谷赤坂方面に向うもの等各自思い思いに其未だ至らざる方面に急ぎ申候。野生外士四五名は土産物買集の爲銀座日本橋兩國淺草神田等の商店又觀工場に至り一日を過し申候。

翌日(二十七日)と相候えば本日は東京を去る日とて何となく名殘惜しく朝より市中を駆廻り知己朋友に暇を告げ彼是致し内早や十二時とは相成候へば最早是まで決心仕り進まぬ心に一鞭(ヒトチ)加えて宿を立出で上野停車場に向い申候。稍而一時の發車時間と相成候へは人の山を分け進んで乗車仕り候。此の歸途は高野教諭用を帯びて一週滞京と云う事に相成り當日はプラットホームに一行を送られ申候。稍而汽笛一聲發車仕候へば「何れ其内」との聲を残し多くの見送人の影も森の内へかくれ花の都も今は早や我物には無之候…

一夜は過ぎて早や燭光僅かに東方を染め曉風車窓を漏れて快く彼此致す内仙台へと着仕り此にて客の大半は下車仕り候。一行は停車場前の奥田旅店に宿り申候…

當日(二十八日)は晴天快き小春日に候へ爲め食事を濟し直ちに鹽釜に向け松島見物と出掛申候。氣車は廿分計

にて同地に着仕り、是より一旅店に命じて内の用意をなさしめ其間鹽釜神社へ参詣仕候。當鹽釜は人口左程多きにも無之候へども一寸したる市街にて全く松島見物旅客の爲めに是れ程の所なりし事と存じ候。稍而参詣を濟し宿に至れば三艘の舟は一行遅しと待居依而一行分乗船し案内者二人宛を乗せ追手帆かけて松島灣へと進航士り各艘拍手其快を呼び居り候仰も此所は何この山何この島松樹の見ざるもの無之、或は遠く或は近く洋々として湖上の如き所無数の山家散布し案内者の話によれば松島村まで八十八島にして金華山沖まで八百八島有之候よしに御座候・・・

稍て停車場に就くや否や狽て乗車仕り仙台へ引返し申候。同夜は自由解散にて各自市中を散歩仕候。仙台は人口拾万舊伊達公の城下にて當時宮城縣廳第二師團第二高等學校の所在地にて商業の繁盛は函館に及ばざるやの感有之候へども東北文學美術の中心として東京以北第一の大都會と跨稱(コソウ)する値可有之候・・・

翌日(廿九日)は第一に同行中學生と共に第二高等學校を參觀仕り候。同校は第一高等に比較仕候へは其建築之点は劣れども當時八百の生徒を入れて猶年々志願生を入るるに大に狹隘(キョウアイ)を感ずるとの事校運隆盛に御座候。是より同行中學生と分れ校長の引率之下に同地商業學校參觀仕候。同校は乙種にて現在百餘名の生徒有之候・・・

是より伊達公の靈廟へと歩を轉し内部の拝觀を許れて案内者の申され靴を脱し門を入り候へば壯嚴なる公の廟金箔は脱け黒漆は落ち候へども猶古に名残を止め徐(モロ)ろに二百年の昔を思出され候。是より二代三代と代々の靈廟に至り候。同所は寂然たるに所にて耳に入るも梢頭の風聲と小禽の嘲聲のみにて心もゾットする所に御座候。是より宿に帰り申候・・・

同夜も夢か幻しの間を車中にて過ごし盛岡に着候へは早や暁光暗を破り申候。是より暫くにして大なる牧場を見數千の馬暁風に嘶く(イナク)を見受けられ候。其餘は風々無意味の景色にて通りき申候。青森に着仕り中島屋にて食事を終て直ちに東海丸に乗込み午前拾時出帆函館に向い申候。夜前の瀛車にて睡眠の足らざる為めか俄かに睡を催うし多くは打伏し鼾聲高く前後も知らず夢境に進み申候。稍て一聲の瀛笛は暖き夢を破り驚き甲板に出候へば是れは是れ巴港にてなつかしき山親しき水は一行を迎うものの如く住めば都と實に函館程好き所好き所はあらず嗚呼なつかしやと急ぎ土産物を包み上陸仕候。頃は早や日は西にかくれ四顧茫然稍て棧橋に同窓の友教員等に迎われ校長の辞ありて一行別れ別れに我家へ急ぎ候へし頃は早や天主堂の晚鐘音高く響き申居候。